1－D－1
ハムストリングス筋挫傷における温罨法の効果と有用性

森　一馬（森整骨院）

key words：温罨法、筋挫傷、ハムストリングス、冷罨法、RICE

【背景】柔道整復術の療養費算定基準では、冷罨法は受傷後2日以内、温罨法は受傷後5日間算定できない。一方、近年では急性期の過度な冷却が組織修復に影響する可能性が報告されている。本研究ではハムストリングス筋挫傷に対する早期温罨法の有用性を検討した。【対象】2024年10月から2025年10月までに受傷当日に来院した患者36名を、温罨法群19名（1度11名、2度8名）、冷罨法群17名（1度9名、2度8名）にランダムに割り付けた。【方法】温罨法群は受傷直後から14日間、1日1回20分間温罨法を実施した。冷罨法群は受傷後2日間冷罨法を行い、6日目から14日目まで温罨法を実施した。VAS、MMT、超音波によるパワードプラ（PD）信号と羽状構造を評価した。【結果】温罨法群は冷罨法群よりVAS、MMTの改善が大きく、2度損傷ではVAS改善値2.9対2.2、MMT改善値0.85対0.50であった。温罨法群では早期のPD信号と羽状構造の再構築が観察された。【考察】早期温罨法による血流促進が損傷組織の修復過程に影響し、疼痛軽減、筋力回復、組織再構築を促進した可能性が考えられた。【結語】早期温罨法はハムストリングス筋挫傷後の回復に有用である可能性が示唆された。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本研究に関する研究倫理委員会（倫理審査委員会）を設置する所属機関がなく、委員会審査を受けることができない。研究はヘルシンキ宣言に準拠し、対象者の権利保護、個人情報の保護、不利益の回避に十分配慮して実施した。対象者には研究目的・方法・個人情報の取扱いを説明し、同意を得た。

1－D－2
鎖骨はなぜ『解体新書』で缺盆骨と訳されたのか

荒川政一（接骨医学史研究会）

key words：鎖骨、缺盆骨、かたのほね、解体新書、漢語

【背景・目的】昨年の本学会で、ラテン語の鎖骨claviculaの原義を考察した。日本語で鎖骨という解剖学用語が初めて使われたのは『解体新書』が最初ではない。解体新書では鎖骨を缺盆骨と翻訳している。杉田玄白らはなぜ鎖骨を缺盆骨と訳したのか。鎖骨という解剖学用語が誕生する以前、日本では鎖骨のことを何と呼んでいたのか。以上のことについて歴史的変遷をたどりながら明らかにする。【方法】平安時代以後の鎖骨をあらわす言葉を、一次史料を用いて精査した。【結果】平安時代の『新撰字鏡』『倭名類聚抄』『類聚名義抄』『色葉字類抄』では、「かたのほね」「缺盆骨」と表記されていた。江戸時代の『訓蒙図彙』『無冤録述』『骨継療治重宝記』『家法難波骨継秘伝』『臓腑経絡詳解』『医案類語』『正骨範』『折肱要訣』『整骨撥乱』『整骨新書』『釣玄四科全書』では「かたのほね」「缺盆骨」「巨骨」「□子骨（□は外字）」と記している。【考察】鎖骨の呼び名は、和語ではかたのほね、漢語では缺盆骨であった。江戸時代には缺盆骨以外の漢語も使われていた。しかし杉田玄白らは『解体新書』で鎖骨について新しい訳語を作らず、伝統的な漢語の缺盆骨の名称を使ったと考えられる。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本研究に関する研究倫理委員会（倫理審査委員会）を設置する所属機関がなく、委員会審査を受けることができない。研究はヘルシンキ宣言に準拠し、対象者の権利保護、個人情報の保護、不利益の回避に十分配慮して実施した。対象者には研究目的・方法・個人情報の取扱いを説明し、同意を得た。

1－D－3
AI推定COM軌跡から算出した面積指標の試技間信頼性―開眼単脚立位における予備的検討―

大塚博史（常葉大学）

key words：AI推定COM、単脚立位、面積指標、試技間信頼性、反復測定

【背景・目的】AI推定質量中心（Center of Mass：COM）から算出される面積指標は、単脚立位（Single Leg Stance：SLS）時の身体動揺を簡便に定量化できる可能性がある。一方、矩形面積はX・Y座標の最大値・最小値に基づくため、単発の大きな動揺や推定誤差に影響されやすい。本研究は、AI推定COMから算出した矩形面積の同一測定機会内の試技間信頼性を評価し、算出特性の異なる凸包面積および95％信頼楕円面積と予備的に比較することを目的とした。【方法】健常男性大学生12名に、左右脚支持の開眼SLSを各4試技実施した。前額面から撮影したスマートフォン動画をSPLYZA Motionで解析し、計測開始5秒後から20秒間のAI推定COM軌跡より矩形面積、凸包面積および95％信頼楕円面積を算出した。支持脚別に、二元配置混合効果モデルによる絶対一致のICC(A,1)およびSEMを算出した。【結果】96試技を解析した。ICC(A,1)は、右脚支持、左脚支持の順に、矩形面積0.181、0.085、凸包面積0.198、0.126、95％信頼楕円面積0.180、0.155であった。SEMはそれぞれ1.11、2.08 cm^2、0.66、1.07 cm^2、1.13、1.41 cm^2であった。【考察】3指標すべてでICCは低い点推定を示した。したがって、試技間変動は矩形面積の極値依存性のみでは説明困難であり、AI推定COMの面積系指標全般の測定特性として検討する必要がある。対象者を追加し、推定精度向上後に信頼性と複数試技平均の影響を検証する必要がある。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本研究は常葉大学浜松キャンパス倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：2026-006H）。対象者には研究目的・方法・利益相反・個人情報の取扱いを説明し、同意を得た。